タイトル	輝け瞳　～タンザニアの子と友だちになろう～		
氏名	芝田　峰子		
学校名	奈良県五條市立野原小学校		
担当教科	家庭科　英語（道徳）		
実践教科	家庭科　英語	時間数	6時間
対象生徒学年	6年生	対象人数	49名

カリキュラム案

（1）実践の目的

タンザニアの子どもたちの様子に触れ、文化や社会に学び、持続可能な開発について考えると共に、自分たちに何ができるか考える。

自分たちの文化や社会を見つめ、それを発信することで交流を行う。

（2）授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1限目 テーマ：タンザニアと出会う	(1) タンザニアクイズをする。 (2) カンガを着たり、民芸品にさわったりする。	(1) タンザニアクイズ (2) カンガなどの布 (3) ティンガティンガ
2限目 テーマ：タンザニアに気づく	(1) 自作のDVDを見る。 (2) 気づいたことを出し合う。	(1) DVD
3・4限目 テーマ：タンザニアに触れる	(1) ウガリを調理して食べる。	(1) ウガリ粉 (2) ウガリ棒
5限目 テーマ：ちがいを探そう	(1) 気づいたことから、自分たちの身の回りとちがっていることを出し合う。 (2) さらに大きく異なる子どもたちの暮らしについて知る。	(1) NHK番組DVD (2) ワークシート
6限目 テーマ：ちがいのちがい	(1) 自分たちの見つけたちがいの中で、「あっていいちがい」なのか、「あってはならないちがい」なのか話し合う。 (2) ヨルダンの「ちがい」を紹介してもらう。	(1) 模造紙とちがいカード (2) 杉村さんの話

授業実践の詳細

＜1限目＞タンザニアと出会う

写真や資料からタンザニアクイズを作成し、子どもたちに解いてもらった。地理的な場所や食べ物、衛生面、水、ファッション、言葉、日本とのつながりやHIVのことなど、子どもたちに関心を持ってほしいと思う点に留意しながらクイズを作り、答え合わせをしながら解説を加えていった。

アフリカというだけで、子どもたちの意識の中では遠くて知らないところといった反応が見られた。世界地図を近い国から順に描いていくと、すでにインドあたりで子どもたちはわからなくなる。さらに中継地のドバイあたりまでくると、世界の耳目を集めている地域にもかかわらず、さっぱりの様子。アフリカ大陸そのものもおぼつかない。まして、今の子どもたちにタンザニアの必要性は高くない。

そんな子どもたちに関心を持ってもらうための苦肉の策がクイズ大会だった。写真といえども、その国すべてが現れているわけもなく、本当の一部なのだが、「遠いけど、おもしろそうなところだな」「なになに？」「どうして？」そんな次につながる好奇心を刺激できたように思う。

＜2限目＞タンザニアに気づく

タンザニアで目にしたたくさんのシーンの中から自作のビデオを作成した。子どもたちの学習や遊びの様子、村の大人たちの暮らしぶりなどが伝わるような物を作りたいと考えながら編集を行ったものである。

そのビデオを見て、そこでみつけたこと、気づいたことを出し合った。

肌の色がちがう、髪の毛がみんな同じ、はだし、といった見た目のことから、落第がある、教室が狭い、日本からの先生がいるなどの学校の様子、きれいな水が十分にないことや、エイズなどの病気が多いなどの解決すべき課題など様々なことを出し合うことができた。

＜3・4限目＞タンザニアに触れる

タンザニアでもっとも主食として食べられているウガリを食べた。ただ、ウガリそのものはあまり味のないものなので、学級園で収穫したトマトから作ったトマトソースでミートソースを作って、それといっしょに食べることにした。

折しも、ケニアで海外青年協力隊活動を行っていたJICAの方が来てくださっていたので、食べ方などを伝授していただきながらの会食となった。子どもたちは「ビミョー」といいながらではあったが、楽しく会食し、タンザニアの味に触れることができた。

＜5限目＞ちがいを探そう

クイズやビデオで見たものの中から、日本とタンザニアのちがうところをたくさんみつけていった。また、日本とタンザニアではどうちがうのかについても話し合った。外見や学校での生活、衛生面や経済的なことなど、「ちがう」ということを多方面から考えてくれたと思う。

タンザニアで出会った子どもたちは裕福ではないかもしれないが、比較的安定した生活の中で元気に過ごしているように見えた。しかしながら、世界で起こっていることを自分の問題として考えるためには、「あってはならないちがい」にも気づいてほしいと考えた。そのために、NHKで放映されたハイチのスト

リートチルドレンの番組を視聴した。様々な物や人に脅かされながら路上で暮らし、ときにはゴミの中から食べられるものを食べる生活。子どもたちはショックだったようだが、これもまた現実。自分たちの暮らす「今」を大きく輪切りにするとこんな世界もあるんだとつきつけて、次につなげた。

＜6限目＞ちがいのちがい

話し合いながら、グループでみつけた「ちがい」を「あっていいちがい」と「あってはならないちがい」に振り分けて、その理由を考えていった。子どもたちは、基本的な生活を営む権利や、教育を受ける権利、安心して安全に暮らす権利、健康に暮らす権利などに気づいているようだった。ただ、家電製品を使えないことが「あってはならないちがい」だととらえるなど、自分たちの生活をものさしにして比べているところがあり、もう少し話し合い、考え合うことが必要だと感じた。

その後、ヨルダンで海外青年協力隊として活動していたJICAの方からヨルダンの「ちがい」を教えていただいた。

子どもたちは、様々な地域の「ちがい」を知ることができたと思う。そして、「あってはならないちがい」がたくさん存在しており、なんらかの手だてが必要だということに気づくことができた。

授業実践を通しての所感・反省点・今後の改善策

新型インフルエンザや台風の襲来などがあって、思うように授業が展開できず、後に内容を残すことになってしまった。そんな中にあっても、子どもたちは、自分の気づいたことを出し合いながら、タンザニアを通して、世界に存在する様々な課題の一端について考えることができた。

しかし、「アフリカ」と聞くと、「貧しい」「遅れている」といったイメージが先行しがちで、「よさ」や「学ぶべきところ」にはなかなか思いが及ばなかったのが現状である。笑顔や活力といったムードや感じだけでなく、女性の参画率の高さや水をめぐる自治の意識など学ぶべきところはたくさんあったにもかかわらず、それらを焦点化することができなかった。

これから、さらにいくつかの課題について取り組んでいきたいと考えている。

ひとつは、子どもの権利条約について学ぶことである。自分たちがいかに守られているか、そして、世界の中には守られずに過酷な環境を余儀なくされている子どもたちがどれだけいるかなどを子どもの権利条約から考えていきたい。

二つ目は、外国語活動とタイアップしながら、自分たちを紹介し、つながりを生み出す活動である。実際にビデオクリップを作成して、発信したい。顔の見えるつながりは、新しい対話を生み出すと考えるからである。

三つ目は、自分たちにできることを探す活動である。まだ知らない人たちに伝える活動や、自分たちの生活を見直す活動、募金などの支援の活動など様々な活動が考えられる。子どもたちと模索しながら、その入り口を探したいと考えている。

授業の様子

1限目 クイズ大会とファッションショー

2限目 タンザニアに気づく

5限目 ちがいをさがす

6限目 ちがいのちがい